

# 帯金式甲冑と鏡の副葬

*Obigane-shiki Armor and Mirrors as Grave Goods*

上野祥史

UENO Yoshifumi

はじめに

①鏡と甲冑の生産動向

②甲冑と鏡の共伴状況

③三角縁神獸鏡と帯金式甲冑の副葬

④地域における帯金革綴式甲冑と保有鏡の副葬

⑤帯金式甲冑と保有鏡の副葬を通してみる古墳時代中期

おわりに

## 【論文要旨】

古墳出土の副葬品には、王権からの配布と地域での副葬という二つの異なる側面がある。配布と副葬は、王権と地域という異なる視点で古墳時代社会を評価したものともいえよう。本論では甲冑と鏡が共伴する現象に注目し、帯金式甲冑を副葬した古墳時代中期の地域の動きを評価した。

甲冑と鏡の生産段階を整理し、古墳における組合せ関係に注目することによって、帯金革綴式甲冑を副葬する段階には、保有鏡を副葬する動きが鮮明になることを指摘した。保有鏡の副葬が、比較的普遍性をもっていたことが明らかになったのである。こうした現象の背景について、三角縁神獸鏡との関係や地域の古墳築造という視点から検討を進めた。

三角縁神獸鏡は、同範鏡によって生産段階＝配布段階の同時性が保証された器物である。甲冑と三角縁神獸鏡の共伴関係は、帯金革綴式甲冑の副葬を境に大きく変容する。新しい甲冑に古い鏡が組合うこの現象は、帯金革綴式甲冑を副葬する段階で鮮明となった保有鏡副葬の実態をより端的に示していることが明らかになった。

地域という視点では、造営形態の異なる古墳群を取り上げ、古墳築造という視点から帯金革綴式甲冑と鏡の共伴関係について検討した。保有から副葬へという動きは、保有鏡の実態や前後に継続する古墳造営の有無など、それぞれの地域の事情を反映して多様な形態があることを示した。

こうした帯金革綴式甲冑の副葬を通して鮮明となる保有鏡の実態は、古墳時代中期前半という時代を象徴する一面である。一方、比較的普遍性をもった保有鏡の存在は、副葬品が王権の配布したものであると同時に、地域の保有するものでもあることを改めて強調する。古墳の副葬品を検討する視点として、王権と地域という視点の違いを改めて認識することの重要性を指摘した。

【キーワード】 帯金革綴式甲冑, 中国鏡, 倭鏡, 三角縁神獸鏡, 保有鏡, 地域社会

## はじめに

古墳時代には、王権より配布された威信財を各地の古墳に副葬した。古墳の副葬品を配布という王権の論理で理解し評価しようとする傾向は強く、分布傾向から王権が意図した戦略や配布の原理を解明しようとする研究が進んでいる。しかし、王権が配布する威信財であっても、入手後ほどなく副葬するものと、長い保有期間を経て副葬するものがあるように、それを副葬するという行為には地域の論理が反映されているのである。王権からの配布と地域での副葬は、連動するとは限らない別次元の現象である。配布と副葬は、王権と地域という異なる視点で古墳時代社会を評価したものともいえよう。これをふまえて、本論では甲冑と鏡が共伴する現象に注目し、帯金式甲冑を副葬した古墳時代中期の地域の動きを評価することにしたい。

### ①……………鏡と甲冑の生産動向

王権は威信財を配布して、その戦略や意識を実体化した。威信財の入手（舶載）や生産動向は、こうした王権の配布戦略を反映している。配布の実態は、威信財の生産段階を整理することによって明らかになるのであり、副葬の傾向からみえてくるものではない<sup>(1)</sup>。副葬の傾向を整理する前提として、まず鏡と甲冑の生産動向を整理してみよう。

#### 1 中国鏡の生産動向

中国大陸では、漢代以後隋唐期に至るまで、漢鏡の影響を受けた鏡の生産が継続した。各時期の鏡生産には特徴があり、3つの段階に区分することができる。すなわち、漢鏡の創造期である漢代と、漢鏡の創作模倣期である三国両晋期、そして漢鏡の踏返模倣期である南北朝期である。

漢代には、時々の思想を反映した鏡式が創出された。鏡式の出現を画期として、紀元前2世紀から2世紀までの400年は7期の生産段階に区分されている〔岡村1984・1993〕。日本列島に関係の深い鏡では、文字を主な文様とする異体字銘帯鏡が紀元前1世紀に出現し、細線で動物文様を表現する方格規矩四神鏡や細線式獣帯鏡などは紀元前1世紀末に出現した。そして、平彫表現の内行花文鏡が1世紀中頃に出現し、浮彫表現の神獣鏡や画像鏡が2世紀前半に出現したのである。

三国両晋期には、新たな鏡式が出現せず、漢鏡を模倣した鏡生産が展開した〔森下1998a, 車崎2002a〕。それは漢鏡を手本として新たに原型もしくは鋳型を製作する模倣生産であり、創作模倣と形容できる。この時期の模倣鏡生産は、同範鏡が多いことや、先祖がえり模倣が頻繁であること、そして同時期に模倣に模倣を重ねることなどを特徴としており、体系的な変遷を追うことが難しい粗製乱造の様相を呈している〔上野2007〕。華北地域では、画文帯神獣鏡や方格規矩四神鏡、細線式獣帯鏡や内行花文鏡、双頭龍文鏡などの模倣鏡を生産していた。華南地域では、銘文帯神獣鏡や夔鳳鏡を中心に模倣鏡の生産が展開する。後漢期から西晋期にかけて生産が継続する神獣鏡では、北の画文帯神獣鏡と南の銘文帯神獣鏡という三国期の南北の対照性が西晋の統一を機になくなり、統一以後は華南地域の神獣鏡で占められる〔近藤1993, 上野2007〕。こうした状況から、華北地域

での創作模倣鏡の生産は、3世紀末頃に終焉を迎えていたと推測できる。華南での終焉については、4世紀に生産を特定できる模倣鏡の存在を欠くことから、創作模倣は4世紀初頭に終焉を迎えていた可能性が高い。三角縁神獸鏡は華北の模倣神獸鏡であるが、生産の画期の年代をめぐって生産期間は伸縮し、いわゆる短期編年と長期編年の相違を生じている〔下垣 2010〕。華北での模倣神獸鏡生産が西晋の統一以後に継続しない可能性が高いことから、三角縁神獸鏡の生産は3世紀末に終焉を迎えていたと考えておきたい。

南北朝期には、漢鏡を踏返すことを基調とした模倣鏡の生産が展開する〔車崎 2002b〕。漢鏡の図像を転用することは、三国両晋期の創作模倣と異なっており、踏返模倣と形容できよう。漢鏡を踏返すだけではなく、外区などに改変を加えたものも存在している。漢鏡に改変を加えたものは踏返模倣鏡であることを容易に識別できるが、漢鏡と形態が同じものは、長期保有した漢鏡か、南北朝期における踏返模倣であるのかを判断することが難しい。南齊の建武五年銘鏡の存在や南北朝や隋代の墓に副葬した踏返模倣鏡から、南北朝期に踏返模倣鏡の生産が展開したことを指摘できるのが限界であり、踏返模倣の開始と終焉については不明瞭である。なお、古墳時代中期から後期の古墳に副葬した同型鏡群は、踏返模倣鏡の典型例であり、同じ同型鏡でも外区に改変を加えたものが数多く存在している〔川西 2004〕。

以下では、各期の生産動向を反映して、漢鏡と三国西晋鏡と南北朝鏡に区分して中国鏡を取り扱うことにする。

## 2 倭鏡の生産動向

日本列島では、3世紀から6世紀まで古墳時代を通じて、倭鏡の生産が継続した。倭鏡は中国鏡を模倣しつつも、独自の表現様式をもつことを特徴とする。倭鏡は、内区の図像表現の退化過程によって鏡式（系列）ごとに細かな変遷が整理され、外区の文様表現や形態によって鏡式（系列）をこえた生産段階が設定されている。古墳時代を通じた倭鏡生産は3期に区分されており、第1期が古墳時代前期に相当し、第2期が中期前半、第3期が中期後半から後期にかけての時期に相当している〔森下 1991・2002〕。

第1期の倭鏡生産では、単胴双頭神鏡系倭鏡<sup>(2)</sup>や方格規矩四神鏡系倭鏡に内行花文鏡系倭鏡など数多くの鏡式（系列）を創出した。神獸鏡や画像鏡、方格規矩鏡や細線式獸帯鏡、内行花文鏡など数多くの漢鏡が模倣の対象となったが、独自の図像表現や組合せを創出することによって多様な倭鏡が誕生したのである。その多様性は、大小の格差を表現するものでもあった。単胴双頭神鏡系倭鏡は複数の神獸鏡を融合することで成立した大型鏡であるが、創出当初よりその図像表現の一部を抽出した小型の獸毛文鏡系倭鏡や振文鏡系倭鏡も生産されていた。そこには、形態と数量によって格差を表現すべく倭鏡を創出した王権の配布戦略がうかがえる〔下垣 2003a・b〕。そして、対置式神獸鏡系倭鏡が遅れて出現するように、新たな模倣や新しい要素の導入は創出期のみに限らず、倭鏡生産には絶えず新たな展開が生じたのである。倭鏡生産の開始は、古墳における副葬鏡の組合せから、いわゆる倭製三角縁神獸鏡の配布よりも一段階溯ることが指摘されている〔岸本 1996〕。なお、第1期の外区文様は、菱雲文や複合鋸歯文など多様な形態から次第に鋸歯文系へと集約してゆく。

第2期の倭鏡生産は、斜縁神獸鏡系倭鏡や珠文鏡系倭鏡などわずかな系列に限られた。神獸を表

現する浮彫鏡群では、外区文様に二重の鋸歯文をもつことを指標としており、二重の鋸歯文の間には複線波文などを表現する。第2期は、多種多様な系列の生産が展開した第1期とは様相が大きく異なったのである。

第3期の倭鏡生産は、同向式神獸鏡B系倭鏡や旋回式獸像系倭鏡や乳脚文鏡系倭鏡などの系列が出現し、前段階から生産が継続する珠文鏡系倭鏡や内行花文鏡系倭鏡にも新たな動きが生じた。旋回式獸像鏡系倭鏡と乳脚文鏡系倭鏡などは面径が異なっており、この段階の倭鏡生産でも大小という形態によって格差を表現していた。なお、第3期の後半には、南北朝鏡である同型鏡群の同向式神獸鏡を模倣した交互式神獸鏡を創出する。日本列島に流入した同型鏡群とそれを模倣して創出した倭鏡を頂点として、大小の形態で格差を体現した各種の倭鏡を生産したのである〔上野2004〕。第3期の外区文様は、「ハ」字形の複線波文を特徴としており、鋸歯文系から櫛歯文系の表現へと変遷してゆく。なお、この段階に、周縁に鈴を加えた鈴鏡の形態が出現した。

倭鏡生産は、第1期に活況を呈し、第2期には停滞する。そして、第3期には再び活況を呈すると形容することができよう。生産が活況を呈する第1期と第3期には、系列で大小を作り分けており、形態によって格差を表現しようとした王権の意図が倭鏡生産に反映されている。また、中国鏡との関係から、第1期倭鏡が三国西晋鏡に後続すること、第3期倭鏡が南北朝鏡と併行することが指摘できよう。

以下では、生産段階を反映した第1期倭鏡と第2期倭鏡と第3期倭鏡に区分して倭鏡を取り扱うことにする。

### 3 古墳出土甲冑の生産動向

古墳時代の前期から後期を通して、甲冑の副葬は継続する。有機質製の甲冑を除外すれば、甲冑の副葬は、帯金式甲冑期とそれを前後する3段階に区分することができる。小札革綴甲・小札革綴甲と堅矧板革綴短甲と方形板革綴短甲を副葬する帯金式甲冑以前の段階と、帯金式甲冑を副葬する段階、そして、小札甲（挂甲）と衝角付冑を副葬するそれ以後の段階である。極端に段階の異なる甲冑が共伴することは少ないため、おおむね製作順序に対応して甲冑の副葬が推移したと考えられている。こうした出土甲冑の変遷は早くから整理されており〔末永1934・1944〕、1970年代の整理をへて大枠での認識が確立した〔小林1959、大塚1959、北野1963、野上1968、小林1974a・b、田中1991〕。それぞれは、前期型甲冑、中期型甲冑、後期型甲冑として広く認識されている〔古谷2009、阪口2009、鈴木2009、横須賀2009等〕。一方、甲冑の製作には、鉄板の成形や整形、そして鉄板を連結する組上や覆輪などを施す仕上など複雑な工程が存在している。複雑な工程の背景にある多様な製作技術への着目は、型式分類に基づいた生産段階の整理や系譜の検討を大きく進めたのである〔古谷1996、阪口2001〕。甲冑の生産段階や製作技術の系譜は、個別の甲冑形式ごとに整理が進んでいる。

小札革綴甲冑は、中国漢代の甲冑の系譜をひく舶載製品である〔橋本1996〕。堅矧板革綴短甲は、朝鮮半島南部で出土する縦長板釘結短甲などとの関係が想定できる短甲であるが、鉄板の連接技法や鉄板（地板）形状の特徴から、朝鮮半島南部の影響を受けて日本列島で創出した甲冑である可能性が高い〔高橋1993、橋本1998、阪口2005〕。方形板革綴短甲は、東アジアの甲冑に系譜が見出しに

くく、革綴技法や押付板成形の共通性や連続性から、堅矧板革綴短甲や帯金式甲冑との連続性が積極的に指摘されている [橋本 1998, 古谷 2006]。

帯金式甲冑は、帯金というフレームに地板を連結して組上げた甲冑である [古谷 1996]。帯金を特徴とする甲冑は、日本列島に特有な形態の甲冑である。東アジアにおける構造の特殊性や分布状況は、日本列島での生産を示唆する。帯金式甲冑に対しては、主に製作技術の観点から系譜あるいは型式分類の検討が進んでおり、個別の形式ごとに生産段階の変遷は細かく整理されている [吉村 1988, 滝沢 1991, 橋本 1995, 阪口 1998, 鈴木 2004 等]。

小札甲（挂甲）は、装着状態での可動性が高い騎兵の武装を起源としており、鮮卑や高句麗など東北アジアの系譜を引く甲冑である。威技法や鉄板の形状によって系譜や時期を区分することが可能であり、日本列島では鋳留技法を導入した中期後半以降から後期に至るまで生産が継続したことが指摘されている [清水 1996, 内山 2008 等]。後期古墳で小札甲と組合う堅矧広板鋳留衝角付冑は、帯金式甲冑の系譜を引いて後期に出現した甲冑である。

日本列島での甲冑生産は、一方で朝鮮半島からの影響を受け、一方で技術的或いは形態的な連続性を保ちつつ、前期から後期まで継続した。以下では、小札革綴甲冑<sup>(3)</sup>、堅矧板革綴短甲、方形板革綴短甲、帯革綴式甲冑、帯金鋳留式甲冑、小札甲という区分で甲冑を取り扱うことにする。

## ②……………甲冑と鏡の共伴状況

王権が配布した威信財は、各地で古墳へと副葬された。しかし、生産段階の異なる威信財が共伴する例が少なからず存在する。ここでは、先の生産段階の整理をふまえて甲冑と鏡の組合せ<sup>(4)</sup>を整理し、副葬の画期や傾向を検討することにしよう (表1)。なお、小札革綴冑を除けば、冑の単独副葬はほぼ存在しないことから、主に短甲と鏡の組合せを以て甲冑と鏡の組合せを整理することにす<sup>(5)</sup>る。

### 1 甲冑形式と共伴鏡 (表1)

小札革綴冑に共伴する鏡は、漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡である。共伴鏡の大半は三国西晋鏡である。堅矧板革綴短甲の副葬は、3古墳に限られている。大阪府紫金山古墳では、漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡が共伴しており、山梨県大丸山古墳では漢鏡と三国西晋鏡が共伴している。岡山県奥の前1号墳では、第1期倭鏡が共伴している。漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡が共伴することと、三国西晋鏡が多い状況は、小札革綴冑と同じである。方形板革綴短甲に共伴する鏡は、漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡であり、三国西晋鏡の共伴が多い。漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡が共伴することや三国西晋鏡が多い状況は、小札革綴冑や堅矧板革綴短甲と共通している。

帯革綴式甲冑については、帯革綴式甲冑のみの副葬と帯金鋳留式甲冑を伴うものとを区別して示した。帯革綴式甲冑のみの副葬に共伴する鏡は、漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡と第2期倭鏡である。最も多いのは第1期倭鏡であり、三国西晋鏡がそれに次ぐ。帯金鋳留式甲冑を伴う帯革綴式甲冑には、漢鏡と三国西晋鏡に第1期倭鏡と第2期倭鏡が共伴している。しかし、倭鏡が大半を占めており、漢鏡や三国西晋鏡の中国鏡は少ない。倭鏡は第1期倭鏡と第2期倭鏡が同程度で

あり、帯金革綴式甲冑のみの副葬と比べて第2期倭鏡の比率が高い。帯金鉾留式甲冑の共伴の有無によって、生産段階の遅い鏡の比率が高くなっている。なお、帯金革綴式甲冑のこうした様相は、長方板革綴短甲と三角板革綴短甲でおおむね共通しており、地板形状による共伴鏡の違いはない。

帯金鉾留式甲冑についても、帯金鉾留式甲冑のみの副葬と、小札甲を伴うものとを区別して示した。帯金鉾留式甲冑のみの副葬では、漢鏡と三国西晋鏡と南北朝鏡とすべての段階の倭鏡が共伴している。その中では、南北朝鏡と第3期倭鏡が大半を占めている。第1期倭鏡と第2期倭鏡は一定数存在するが、漢鏡や三国西晋鏡は少ない。なお、漢鏡については、南北朝期の踏返鏡である可能性を考えておく必要がある。小札甲を伴う帯金鉾留式甲冑では、南北朝鏡とすべての段階の倭鏡が共伴している。共伴する鏡の数は少ないが、南北朝鏡と第3期倭鏡が多く、漢鏡や三国西晋鏡を含んでいない。帯金鉾留式甲冑のこうした様相は、三角板鉾留短甲と横矧板鉾留短甲でおおむね共通しており、ここでも地板形状による共伴鏡の違いはない。

小札甲では、すべての中国鏡と倭鏡が共伴している。しかし、南北朝鏡と第3期倭鏡が大半を占めており、それ以外の鏡の比率は低く、生産段階の早い三国西晋鏡や第1期倭鏡は少ない。なお、帯金鉾留式甲冑との共伴鏡でもふれたように、漢鏡については南北朝期の踏返鏡である可能性を考えておく必要がある。

## 2 甲冑と鏡の組合せとその傾向

まず、それぞれの甲冑形式に組合う最新相の鏡に注目してみよう。小札革綴冑と堅矧板革綴短甲と方形板革綴短甲という、帯金式甲冑以前の甲冑に共伴する鏡の最新相は第1期倭鏡である。帯金革綴式甲冑と共伴する鏡の最新相は第2期倭鏡であり、帯金鉾留式甲冑や小札甲と共伴する鏡の最新相は南北朝鏡と第3期倭鏡である。共伴鏡の最新相によって、帯金式甲冑以前、帯金革綴式甲冑、帯金鉾留式甲冑と小札甲という3段階に区分することができる。

次に、組合せの中心となる鏡に注目してみよう。帯金式甲冑以前の甲冑では、共伴鏡は三国西晋鏡を中心としている。帯金革綴式甲冑では、共伴鏡の大半は三国西晋鏡と第1期倭鏡であり、第1期倭鏡を中心としている。帯金革綴式甲冑でも帯金鉾留式甲冑を伴う場合には、共伴鏡の中心は第1期倭鏡と第2期倭鏡となる。帯金鉾留式甲冑では、共伴鏡の中心は南北朝鏡と第3期倭鏡であり、小札甲でも、共伴鏡の中心は南北朝鏡と第3期倭鏡である。なお、小札甲を伴う帯金鉾留式甲冑でも同じ傾向がみえる。総じて、甲冑形式の生産段階にあわせて、共伴鏡の中心も三国西晋鏡から第1期倭鏡へ、そして南北朝鏡と第3期倭鏡へと変化する様子が見える。小札革綴冑から小札甲までの甲冑の生産段階に対応して、共伴鏡の最新相が変化し、共伴鏡の中心も推移してゆく傾向を指摘できよう。

一方、共伴鏡の最新相と共伴鏡の中心を対照することによって、帯金鉾留式甲冑の副葬を境とした変化がみえてくる。帯金式甲冑以前の甲冑と帯金革綴式甲冑では、最新相よりも生産段階の古い鏡が共伴鏡の中心となるのに対して、帯金鉾留式甲冑と小札甲では、最新相の鏡が共伴鏡の中心となっている。帯金革綴式甲冑の副葬までは、甲冑よりも生産段階の古い鏡を伴うことが多く、帯金鉾留式甲冑と小札甲の副葬では、甲冑と生産段階が同じ鏡を伴うことが多いことを示している。ここでは、中期的な帯金革綴式甲冑に前期的な三国西晋鏡や第1期倭鏡が伴うという現象が鮮明に

表1 甲冑と鏡の共伴状況

中国鏡	鏡生産段階						備考
	倭鏡	漢鏡	三国西晋鏡	第1期	第2期	南北朝鏡	
小札革綴冑	7	85	2(3)				三重県石山古墳・京都府瓦谷1号墳を含む
堅矧板革綴短甲	3	11	2				
方形板革綴短甲	3	12	6				京都府瓦谷1号墳を含む
帯金式甲冑(革綴のみ)	10(4)	16(10)	29(15)	6(1)			三重県石山古墳を含む
帯金式甲冑(革綴・鉄留共伴)	1	5	8(4)	13			奈良県五条猫塚古墳を含む
帯金式甲冑(鉄留のみ)	3(1)	6	17(2)	13(6)	17(2)	24	熊本県江田船山古墳を含む
帯金式甲冑(鉄留)と挂甲共伴			2	2	4	3(1)	
小札甲	6	3	4	4	14	24	

※いずれも数量は面数 カッコ内は甲冑と別埋葬施設での共伴を示す。伝出土情報は含めず。

※同一古墳で複数の埋葬施設甲冑副葬があり、いずれにおいても鏡副葬がみえる場合は、重複を避けて数を計測した。  
(大阪府和泉黄金塚古墳, 兵庫県宮山古墳, 兵庫県亀山古墳, 福井県向山1号墳など)

なっている。それは、帯金革綴式甲冑と生産段階が同じ第2期倭鏡の生産が停滞しており、その絶対数が少ないことに要因の一つがある。しかし、帯金革綴式甲冑が三国西晋鏡や第1期倭鏡を伴うという傾向こそより重要である。帯金式甲冑が第1期倭鏡と共伴することはすでに指摘されているが[森下1998b], 帯金革綴式甲冑の副葬全般を通して、前期的な古い鏡を副葬する事例が少なくないことを示すからである。

では、帯金革綴式甲冑を副葬する段階に顕著となる、新しい甲冑と古い鏡が共伴する現象は何に起因するのであろうか。そこには、古い鏡の配布時期をめぐる二つの相反する見解が存在している。一つは、古い鏡の配布期間が長期に及ぶことを前提として、新しい甲冑も古い鏡も同時期に地域へもたらされたと理解する見解である[田中1993]。一方、前期から後期まで継続する倭鏡生産の様相から各型式の配布期間は短く、早くに地域へもたらされて地域で保有を経た古い鏡が、新たに配布された甲冑と組合ったと理解する見解がある[森下1998b等]。それは、共伴した二種の副葬品にみえる生産段階の大きな開きを、配布元である王権での保有に帰するのか、配布先である地域での保有に帰するのかという見解の相違である。ここで指摘した、新しい甲冑と古い鏡との共伴現象は、帯金革綴式甲冑に限るものではなく、帯金式甲冑以前にも共通する現象であり、幾分その傾向は弱まるものの帯金鉄留式甲冑でもみえる現象である。配布を副葬に近接させて理解する前者の視点では、中国鏡・倭鏡を問わず古い鏡の配布が長期にわたって継続することとなる。先にも指摘したように、古墳時代を通じて絶えず新しい鏡を入手し創出する状況では、入手時期や生産期間に対応した短期間においてこそ威信財の配布は有効であり意味をもつ。生産期間を超えて配布が長期にわたることは想定しにくい。新しい甲冑と古い鏡の共伴現象は、地域において古い鏡を保有した結果であると考えておきたい。

古墳に副葬した甲冑と鏡の組合せ関係は、それぞれの生産段階を反映して連続的に推移しつつも、

帯金鉾留式甲冑を副葬する段階を境として大きな変化が生じた。それは、最新相の鏡をめぐる動きであり、保有鏡<sup>(8)</sup>の副葬から入手鏡への副葬へと様相が大きく転換したといえよう。一方、この変化を指摘することによって、帯金革綴式甲冑の副葬に保有鏡の副葬が重なるという現象がより鮮明となった。それは、入手より間をおかない副葬と、長期にわたる保有を経た副葬とを象徴しており、副葬という行為には地域の意志が大きく作用することを示している。以下では、帯金革綴式甲冑と保有鏡を副葬する現象に注目し、その背景にある「地域の動き」へと検討を進めることにしよう。

### ③……………三角縁神獸鏡と帯金式甲冑の副葬

三角縁神獸鏡は、本論で取り上げたすべての甲冑に共伴している。三角縁神獸鏡と生産（配布）段階が大きく異なる帯金式甲冑や小札甲との共伴関係については、甲冑と鏡の配布時期の異同をめぐって見解がわかれている〔田中1993、福永1998、森下1998b〕。ここでは三角縁神獸鏡に注目して、帯金革綴式甲冑と保有鏡を副葬した実態を明らかにする。

#### 1 三角縁神獸鏡と甲冑の共伴関係（表2）

三角縁神獸鏡の生産段階は、神獸像の図像表現による分類を基礎として、図像配置や分割原理、断面による鏡体形状、乳形状や乳配置などの製作情報に基づいて段階を設定し、それを古墳での共伴関係によって検証する方法で整理が進んでいる〔岸本1989・1995、新納1991、澤田1993、福永1994・1996、岩本2003・2008、辻田2007、下垣2010〕。舶載三角縁神獸鏡と倭製三角縁神獸鏡とを区分し、舶載三角縁神獸鏡を波文帯鏡群とそれ以外を区分した生産段階は、おおよそ各論で共通しているが、段階の区分など細部では違いが生じている。ここでは、舶載鏡と倭製鏡とを区分して示すにとどめ、舶載鏡では三神三獸鏡が後出の形態であるという相対的な新古の関係を以て検討することにした<sup>(9)</sup>。四分割原理の四神四獸鏡系を古相として、六分割原理の三神三獸鏡系を新相として扱うことにする〔福永1996〕。

小札革綴冑と共伴する三角縁神獸鏡は、倭製鏡が1面である他はいずれも舶載鏡である。舶載鏡は大半が古相の鏡であり、新相の鏡は京都府椿井大塚山古墳と福岡県石塚山古墳で出土した天王日月・獸文帯三神三獸鏡（目録番号105）と日日日金・獸文帯三神三獸鏡（目録番号107）の4面のみである。奈良県黒塚古墳と兵庫県西求女塚古墳と京都府椿井大塚山古墳と福岡県石塚山古墳では、複数の同範鏡を分有している（図2）。

堅矧板革綴短甲と共伴する三角縁神獸鏡は、舶載鏡と倭製鏡である。舶載鏡は三神三獸鏡系の新相の鏡のみであり、四神四獸鏡系の古相の鏡は共伴しない。倭製鏡は、大阪府紫金山古墳に副葬した9面である。そのうちの1面である獸文帯三神三獸鏡（目録番号230）は、小札革綴冑を副葬した京都府妙見山古墳と同範関係を有している。

方形板革綴短甲と共伴する三角縁神獸鏡は、舶載鏡と倭製鏡である。舶載鏡は、四神四獸鏡系の古相の鏡が1面と、三神三獸鏡系と二神二獸鏡系の新相の鏡が4面である。倭製鏡は、獸文帯三神三獸鏡（目録番号216）の同範鏡2面のみであり、奈良県新沢500号墳と京都府園部垣内古墳で分有している。

帯金革綴式甲冑と共伴する三角縁神獸鏡は、舶載鏡のみである。舶載鏡でも、三神三獸鏡系の新相の鏡は含んでいない。なお、長方板革綴短甲と共伴する三角縁神獸鏡は、静岡県松林山古墳より出土した吾作二神二獸鏡（目録番号101）を除いて、小札革綴冑の共伴鏡と同範関係にある。

帯金鉾留式甲冑や小札甲と共伴する三角縁神獸鏡も、舶載鏡のみであり、倭製鏡を欠いている。奈良県円照寺墓山1号墳では新相の獸文帯三神三獸鏡（目録番号115）が共伴しており、千葉県城山1号墳では古相の吾作三神五獸鏡（目録番号25）が共伴していた。後者は、兵庫県西求女塚古墳や京都府椿井大塚山古墳でも同範鏡が出土しており、小札革綴冑の共伴鏡と同範関係にある。

以上のような甲冑と三角縁神獸鏡の関係は、大きく3つの組合せに分けることができる。一つは、小札革綴冑と古相の舶載鏡の組合せであり、一つは、堅矧板革綴短甲・方形板革綴短甲と新相の舶載鏡・倭製鏡の組合せ、そして、帯金式甲冑・小札甲と舶載鏡の組合せである。帯金革綴式甲冑以後は、いずれも舶載鏡のみが共伴しており、倭製鏡とは共伴していない[福永1998]。なお、その舶載鏡は、大半が古相の三角縁神獸鏡であることを特徴としている。それは、帯金革綴式甲冑を境として、甲冑と三角縁神獸鏡の組合せ関係が大きく変化することを意味する。帯金革綴式甲冑という新しい甲冑に舶載鏡という古い鏡が共伴しており、ここに甲冑と三角縁神獸鏡の相対的な新古関係が崩れるのである。

## 2 同範鏡という視点での評価(表2, 3)

帯金革綴式甲冑の副葬を境に生じた、甲冑と三角縁神獸鏡の組合せ関係の変化を、同範鏡という視点から検討してみよう(表2)。甲冑を副葬する古墳は、三角縁神獸鏡の同範鏡をも分有している。小札革綴冑を副葬する古墳と帯金式甲冑を副葬する古墳で同範鏡を分有しているのはその一例である。甲冑副葬古墳で分有する同範鏡には、同じ形式の甲冑が組合同範鏡と、異なる形式の甲冑が組合同範鏡に分けることができる。前者を同範鏡Aと呼び、後者を同範鏡Bと呼ぶことにしよう。同範鏡Aは、小札革綴冑と共伴する吾作四神四獸鏡(目録番号35)や天王・日月・獸文帯四神四獸鏡(目録番号70・74)、方形板革綴短甲と共伴する獸文帯三神三獸鏡(目録番号216)がある。奈良県黒塚古墳と兵庫県西求女塚古墳と京都府椿井大塚山古墳と福岡県石塚山古墳では、数多くの同範鏡Aが存在している(図2)。それに対して、同範鏡Bは、小札革綴冑と堅矧板革綴短甲に共伴する獸文帯三神三獸鏡(目録番号230)や、小札革綴冑と小札甲に共伴する吾作四神四獸鏡(目録番号35)がある。小札革綴冑と帯金式甲冑に共伴する同範鏡Bは多く、王氏徐州銘四神四獸鏡(目録番号79)や吾作三神四獸鏡(目録番号40)や波文帯盤龍鏡(目録番号3)や天王日月・獸文帯四神四獸鏡(目録番号68)がある。視点を変えれば、帯金式甲冑と共伴する同範鏡は、同範鏡Bに限られていることを指摘できよう。

同範鏡Aと同形式の甲冑の組合せは、特定の生産段階にある鏡と甲冑の組合せが複数存在することを示しており、王権が鏡と甲冑を配布する段階、すなわち地域が鏡と甲冑を入手する段階が同じであることを示している。小札革綴冑と古相の三角縁神獸鏡の入手段階が同じであり、方形板革綴短甲と倭製三角縁神獸鏡の入手段階が同じであることを指摘できよう。それに対して、同範鏡Bと異形式の甲冑の組合せは、鏡の生産段階が同じであっても、生産段階の異なる甲冑が組合同範鏡となる。鏡の入手段階は同じであっても、甲冑の入手段階に違いがあることを示している。先にも

表2 三角縁神獸鏡と甲冑の共伴

古墳名	甲冑			奈良・黒塚	兵庫・西求女塚	京都・椿井大塚山	福岡・石塚山	滋賀・雪野山	京都・妙見山	大阪・紫金山	山梨・大丸山	京都・園部垣内	奈良・新沢500号	奈良・鴨都波	福岡・若八幡	大阪・和泉黄金塚	奈良・池ノ内5号	京都・芝ヶ原11号	岐阜・龍門寺1号	静岡・松林山	福岡・老司	奈良・室宮山	京都・久津川車塚	奈良・円照寺墓山1号	千葉・城山1号	その他の同範鏡出土古墳	
	鏡式名	目録	同範	表現	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑	小札冑		小札冑
波文帯盤龍鏡	3	4	盤	●	●											●	★									愛知・奥津社(伝)	
波文帯盤龍鏡	5		盤					●																		福岡・藤崎	
吾作三神五獸鏡	25	12	⑦		②	●																				岐阜・旧可児町(伝)	
吾作四神四獸鏡	35	19	①	●	●	②	●																			広島・中小田1号, 大阪・万年山	
新出四神四獸鏡	39		⑭					●																		フリア美術館	
吾作三神四獸鏡	40	21	④	●	●																					兵庫・水堂	
唐草文帯四神四獸鏡	41	22	④																				●			兵庫・西野山3号	
天王日月・唐草文帯四神四獸鏡	44	25	④	●		●	●																			兵庫・吉島②, 奈良・佐味田宝塚, 静岡・赤門上, 出土地不明	
吾作四神三獸博山炬鏡	54		⑥									●														イタリア博	
日・月・獸文帯四神四獸鏡	65	34	他																							愛知・奥津社(伝)	
天王日月・獸文帯四神四獸鏡	68	35	②	●		●																				宮崎・持田(推定)	
天王・日月・獸文帯四神四獸鏡	70	37	②	②			●																			福岡・御陵	
天王・日月・獸文帯四神四獸鏡	74	39	②	③			●																			岡山・湯迫車塚, 奈良・新山	
王氏徐州銘四神四獸鏡	79	42	①	②																						滋賀・古富波山	
天・王・日・月・唐草文帯二神二獸鏡	94	—	④																								
□是作二神二獸鏡	99	—	③																								
吾作二神二獸鏡	101	—	他	▲																							
長・宜・子・孫・獸文帯三神三獸鏡	102	57	⑯							●																	福岡・原口
天王日月・獸文帯三神三獸鏡	105	60	③			●	②																				福岡・原口, 福岡・天神森, 大分・赤塚
日日日金・獸文帯三神三獸鏡	107	—	⑥				●																				
日・月・獸文帯三神三獸鏡	110	63	⑤							●																	岐阜・坂尻1号, 静岡・寺谷銚子塚, 出土地不明
櫛齒文帯三仏三獸鏡	122	68	⑮									●															京都・寺戸大塚[後門部], 京都・百々ヶ池
波文帯三神三獸鏡	127	70	⑪																								大阪・弁天山C1, 愛知・東之宮, 栃木県博
波文帯三神四獸鏡	138		他																								岡山・一宮(伝)
獸文帯三神三獸鏡	115	66	⑪																					●		兵庫・城の山	
唐草文帯三神二獸鏡	201	101								●																	岡山・鶴山丸山, 泉屋博古館
唐草文帯三神三獸鏡	204	103								②																	福岡・沖ノ島17号, 大阪・壺井御旅山, 京都・百々ヶ池
鳥文帯三神三獸鏡	205	104																									奈良(伝)
獸文帯三神三獸鏡	216	112																									
獸文帯三神三獸鏡	230	114							●																		岡山・花光寺山, 奈良・南都御陵(伝)
獸文帯三神三獸鏡	232	—																									
獸文帯三神三獸鏡	206	105																									山口・長光寺山, 兵庫・親王塚, 奈良・新山
獸文帯三神三獸鏡	207	106																									大分・免ヶ平, 山口・長光寺山②, 岡山・鶴山丸山(伝), 奈良(伝), 滋賀・亀塚, 三重(伝), 岐阜・野中[南石室], 京博

●:1面出土 丸番号:出土面数 ★:甲冑とは別埋葬施設での共伴鏡 ▲:同範鏡ではないが最も関係の深い鏡 ※伝出土資料は除外

指摘したように、古墳時代を通じて絶えず新しい鏡や甲冑を入手し創出する状況では、入手時期や生産期間に対応した短期間においてこそ威信財の配布は有効であり意味をもつ。王権の意図を敏感に反映して変化する威信財の配布が、生産時期を越えて長期にわたることを想定するのは難しい。生産段階の異なる鏡と甲冑の組合せは、早くに配布され地域で保有した同範鏡が後出形式の甲冑に共伴したことを示している。黒塚古墳と西求女塚古墳と椿井大塚山古墳に同範鏡Aと同範鏡Bが混在していることがそれを象徴する(表3)。こうした保有鏡を副葬する現象によって、甲冑と三角縁神獸鏡との組合せ関係は、帯金革綴式甲冑の副葬を境に変化が生じたのである。

さて、同範鏡の分有関係は、配布した王権の配布戦略を反映している[小林1961]。そこに甲冑が共伴することは、同範鏡と甲冑の配布戦略が重なることを示しているが、同範鏡Aと同範鏡Bでは評価が異なってくる。同範鏡Aは、鏡と甲冑による二つの配布戦略が同時期に重なることを示している。小札革綴冑と古相の三角縁神獸鏡との強い結びつきは、すでに指摘されているように配布戦略が重なっていたことを象徴している[岡村1999]。方形板革綴短甲と倭製三角縁神獸鏡についても、獸文帯三神三獸鏡(目録番号216)の同範鏡は2面しかないが、いずれも方形板革綴短甲を伴うことから、倭製三角縁神獸鏡と方形板革綴短甲の配布意図が重なる一面があることを評価できよう。同範鏡Bは、古相の三角縁神獸鏡を配布した地域に帯金式甲冑を配布するという、異なる時期の配布が重複した可能性はある。しかし、帯金式甲冑の副葬では、三角縁神獸鏡を共伴すること自

表3 小札革綴冑出土古墳での同範鏡共有状況

古墳名	鏡式名	目録	同範	表現	奈良・黒塚	兵庫・西求女塚	京都・椿井大塚山	福岡・石塚山
波文帯盤龍鏡		3	4	盤	●		●	
天王日月・獸文帯同向式神獸鏡		9	6	②			●	
天王日月・獸文帯同向式神獸鏡		10	—	②			●	
陳氏作四神二獸鏡		16	9	④			●	
新作徐州銘四神四獸鏡		18	75	⑭				
張氏作三神五獸鏡		21	10	①	●		●	
吾作三神五獸鏡		23	11	①	●			
吾作三神五獸鏡		25	12	⑦		②	●	
吾作三神五獸鏡		26	13	⑦			②	
吾作五神四獸鏡(対置式)		28	14	①			●	
吾作四神四獸鏡		32	16	⑦			●	
陳・是・作・竟・四神四獸鏡		33	17	⑦	●			
張氏作四神四獸鏡		34	18	①	●		●	
吾作四神四獸鏡		35	19	①	●	●	②	●
吾作四神四獸鏡		36		①	②			
吾作徐州銘四神四獸鏡		37	20	⑭	●	●	●	
吾作三神四獸鏡		40	21	④	●	●		
櫛歯文帯四神四獸鏡		42	23	①			②	
天王日月・獸文帯四神四獸鏡		43	24	⑤	●		●	
天王日月・唐草文帯四神四獸鏡		44	25	④	●		●	
天王日月・獸文帯四神四獸鏡		46	27	②			③	
陳是作四神四獸鏡		52		⑦	●			
吾作作四神四獸鏡		52		⑦	②			
張是作四神四獸鏡		53		⑨	②		●	
画文帯五神四獸鏡		55	29	⑥	●			
画文帯五神四獸鏡		56	30	⑥			●	
天王・日月・獸文帯五神四獸鏡		57	31	⑥	●			
陳是作五神四獸鏡		59		⑥		●		
天・王・日・月・吉獸文帯四神四獸鏡		60		⑥	●			
張是作六神四獸鏡		62		⑨	●			
日・月・獸文帯四神四獸鏡		65	34	他				●
吾作四神四獸鏡		67		⑦	●	●		
天王・日月・獸文帯四神四獸鏡		69	36	②			●	
天王日月・獸文帯四神四獸鏡		68	35	②	●		●	
天王・日月・獸文帯四神四獸鏡		70	37	②	②			●
天王・日月・獸文帯四神四獸鏡		74	39	②	③			●
天王・日月・獸文帯四神四獸鏡		75	40	②			●	
王氏徐州銘四神四獸鏡		79	42	①	②			
天王日月・鋸歯文帯四神四獸鏡		80	43	③			●	
天王日月・獸文帯四神四獸鏡		81	44	③			●	
陳氏四神二獸鏡		82	45	⑧			●	
天・王・日・月・獸文帯二神二獸鏡		92	51	⑤			●	
吾作二神二獸鏡		101	—	他	●			
長・宜・子・孫・獸文帯三神三獸鏡		102	57	⑭				
天王日月・獸文帯三神三獸鏡		105	60	③			●	②
日日月金・獸文帯三神三獸鏡		107	—	⑥				●

アミは帯金式甲冑もしくは掛甲との共伴がある同範鏡

●:1面出土 丸番号:出土面数

体が少ないことから、配布の重複に政治性を評価することには慎重でありたい。古相の三角縁神獸鏡を保有し続けていた地域が帯金式甲冑の配布対象に含まれていたという評価が妥当と考える。

### 3 地域で保有した三角縁神獸鏡と帯金式甲冑の副葬

帯金式甲冑と共伴する三角縁神獸鏡は、地域で保有した鏡の副葬を象徴する存在であることが明らかになった。次に、その実態を古墳の築造という地域の視点から評価することにした。ここでは、久津川車塚古墳と芝ヶ原11号墳という帯金式甲冑と三角縁神獸鏡を副葬する古墳が2基存在する京都府久津川古墳群に注目した。

山城の城陽地域に所在する久津川古墳群は、西山古墳群や平川古墳群や芝ヶ原古墳群など多くの系列によって構成される一大古墳群である〔和田1992, 城陽市史編さん委員会編1999〕。西山古墳群の築造時期は古墳時代前期を中心としており、平川古墳群や芝ヶ原古墳群の築造時期はそれに後続する古墳時代中期を中心とする。当地域での三角縁神獸鏡の副葬は、西山2号墳の陳・是・作・兼・四神四獸鏡(目録番号33)と、久津川箱塚古墳の天王・日月・獸文帯四神四獸鏡(目録番号77)と、芝ヶ原11号墳の吾作三神四獸鏡(目録番号40)と、久津川車塚古墳の唐草文帯四神四獸鏡(目録番号41)がある。帯金式甲冑は、芝ヶ原11号墳で長方板革綴短甲を副葬しており、久津川車塚古墳で三角板革綴衝角付冑2鉢と豎矧細板鉾留衝角付冑1鉢と小札鉾留衝角付冑2鉢に三角板革綴短甲5領を副葬していた。古墳群の中で、帯金式甲冑と三角縁神獸鏡を共伴する古墳が2基存在する珍しい事例である。

三角縁神獸鏡を副葬する古墳は築造時期が異なるものの、久津川古墳群で副葬した4面の三角縁神獸鏡は、いずれも四神四獸鏡系の古相の舶載鏡である。三角縁神獸鏡の生産段階が同じであることは、その配布段階が同じであることを意味しており、4面の三角縁神獸鏡が一括して当地域にもたらされた可能性は高い。前期から中期にかけて長期にわたり久津川古墳群で三角縁神獸鏡の副葬が継続したのは、地域で保有した三角縁神獸鏡を古墳の築造に際して順次副葬した結果である。なお、久津川古墳群では、西山2号墳や西山4号墳、あるいは久津川箱塚古墳で画文帯神獸鏡を副葬しており、三角縁神獸鏡と同じく当地域で保有していた画文帯神獸鏡も古墳の築造を契機として保有を途絶して副葬したものと理解することができよう。当地域では、画文帯神獸鏡も三角縁神獸鏡もともに、地域での保有を経て副葬されたのである。古墳の築造を契機とした保有鏡の副葬が進むなか、芝ヶ原11号墳や久津川車塚古墳では、帯金式甲冑の副葬に三角縁神獸鏡の副葬が重なったと理解することができよう。久津川古墳群は、地域で保有した画文帯神獸鏡や三角縁神獸鏡の副葬が帯金式甲冑の副葬と重なる事例として位置づけることが可能であり、地域で保有した鏡の副葬と帯金式甲冑の副葬が重なる状況は、大阪府桜塚古墳群と同じ様相をみせている〔森下1998b〕。なお、久津川古墳群では、帯金式甲冑の副葬が必ずしも保有鏡副葬の画期とはなっていないことに注意しておきたい。

甲冑と三角縁神獸鏡の共伴関係は、帯金革綴式甲冑の副葬を境に大きく変容する。新しい甲冑に古い鏡が組合う現象は、地域における保有鏡の副葬を反映したものであった。これは、帯金革綴式甲冑を副葬する段階で鮮明となった保有鏡副葬の実態をより端的に示しているものといえよう。帯

金式甲冑と共伴する三角縁神獸鏡は、地域で保有した鏡の副葬を象徴する存在であった。そして、帯金革綴式甲冑と三角縁神獸鏡の共伴関係に、古墳の築造という地域の視点を重ねることによって、地域で保有した三角縁神獸鏡が副葬へと至る過程はより鮮明となるのである。

#### ④……………地域における帯金革綴式甲冑と保有鏡の副葬

ここでは、久津川古墳群に対する指摘をふまえて、いくつかの事例を対象に、古墳築造という地域の視点から、帯金革綴式甲冑と保有鏡を副葬する実態を整理することにしよう。

##### 1 福岡県鋤崎古墳と老司古墳

糸島平野の今宿地域では、古墳時代前期から中期にかけて、山ノ鼻1号墳から若八幡宮古墳、そして鋤崎古墳から丸隈山古墳へと古墳の築造が継続する〔柳沢1992、久住・宮元2010〕。山ノ鼻1号墳では漢鏡の浮彫式獸帯鏡を副葬しており、若八幡宮古墳では三角縁神獸鏡（□是作二神二獸鏡：目録番号99）と方形板革綴短甲を副葬していた。鋤崎古墳には、横穴式石室の埋葬施設に3基の石棺と羨道部の埋葬が存在しており、羨道部には双頭龍文鏡を、1号棺には珠文鏡系倭鏡と獸文鏡系倭鏡を、2号棺には内行花文鏡と振文鏡系倭鏡を、3号棺には長方板革綴短甲と獸文鏡系倭鏡を副葬していた〔柳沢・杉山編2002〕。鋤崎古墳では、帯金革綴式甲冑の副葬に三国西晋鏡と第1期倭鏡の副葬が伴うことを示している。丸隈山古墳では、第1期倭鏡の斜縁神獸鏡系倭鏡と獸文鏡系倭鏡を副葬していた。この地域では、古墳の築造順序と、副葬する鏡や甲冑の生産段階の新古が対応しており、帯金革綴式甲冑の副葬が倭鏡の副葬の端緒となることと、中国鏡を一括して大量に副葬することに重なっていることを指摘できる。

福岡平野の那珂川流域でも、古墳時代前期から中期にかけて、那珂八幡古墳から妙法寺2号墳、そして卯内尺古墳から安徳大塚、老司古墳へ、そして博多1号墳へと古墳の築造が継続する〔柳沢1992、久住・宮元2010〕。那珂八幡古墳に古相の舶載三角縁神獸鏡（画文帯五神四獸鏡：目録番号56）を副葬しており、妙法寺2号墳でも古相の舶載三角縁神獸鏡（陳是作六神四神鏡：目録番号58）を副葬していた。卯内尺古墳には、倭製三角縁神獸鏡（獸文帯三神三獸鏡：目録番号225）の出土を伝える資料がある〔三木1989〕。老司古墳では、4基の石室が埋葬施設として存在し、鏡と甲冑の副葬がみえる。1号石室には甲冑の副葬はなく、模倣方格規矩鏡を副葬していた。2号石室には三角板革綴短甲と唐草文鏡を副葬しており、3号石室には有機質製の冑と鉄製の籠手・草摺・肩甲に複数の鏡を副葬していた〔福岡市教育委員会編1989〕。鏡は、方格規矩四神鏡と、破碎し穿孔した三角縁神獸鏡片、模倣内行花文鏡と模倣方格規矩鏡、振文鏡系倭鏡と内行花文鏡系倭鏡である。帯金革綴式甲冑の副葬に、漢鏡と三国西晋鏡と第1期倭鏡が伴うことを示している。この地域でも、古墳の築造順序と副葬する鏡や甲冑の生産段階の新古が対応しており、帯金革綴式甲冑の副葬が倭鏡を伴うことと、地域で保有する中国鏡の一括副葬とが重なることを指摘できよう。

鋤崎古墳と老司古墳では、ともにその前後に古墳の築造が継続しており、三国西晋鏡から倭鏡へと鏡の副葬が連続して進行する中で帯金革綴式甲冑の副葬が重なった事例として評価することができよう。ここでは、帯金革綴式甲冑の副葬が必ずしも保有鏡副葬の画期とはなっていない。しかし、

両古墳ともに三角縁神獸鏡以外の中国鏡を数多く副葬し倭鏡を副葬する段階であるという点で共通しており、帯金式甲冑の副葬が一つの段階をなしていると評価することも可能であろう。

## 2 大阪府和泉黄金塚古墳と津堂城山古墳

大阪府和泉黄金塚古墳は、和泉中部北半部の信太山地域に初めて築造された大型の前方後円墳である〔松村・広瀬1992〕。和泉黄金塚古墳では、埋葬施設として3基の粘土槨が存在しており、東槨には三角板革綴衝角付冑と小形三角板革綴短甲に環状乳神獸鏡と三角縁神獸鏡（波文帯盤龍鏡：目録番号3）を副葬し、西槨には三角板革綴衝角付冑と長方板革綴短甲に同向式神獸鏡を副葬していた〔末永・島田・森1954〕。中央槨に甲冑の副葬はなく、景初三年銘の同向式神獸鏡と斜縁神獸鏡を副葬していた。いずれの埋葬施設も漢鏡と三国西晋鏡のみの副葬であり、第1期倭鏡を含んでいない。帯金革綴式甲冑の副葬に際して、生産段階の古い鏡を一括して副葬したことを示している。地域で初出の古墳に帯金革綴式甲冑と古相の鏡群を副葬する状況は、新たに入手した帯金式甲冑を副葬する古墳の築造を契機として、地域で保有していた鏡群を埋納した結果として理解することができよう。

河内平野の深奥部、大和川の南岸に広がる古市古墳群は、古墳時代中期を代表する古墳群である。津堂城山古墳は、その古市古墳群の嚆矢となる大型の前方後円墳である。津堂城山古墳では、竪穴式石槨に長持形石棺を埋納しており、小形三角板革綴短甲と複数面の鏡を副葬していた〔藤井1982〕。鏡は多くが破片資料であり、鏡式が判明しているのは、三国西晋鏡の斜縁神獸鏡が2面と、第1期倭鏡の単頭双胴神鏡系倭鏡1面と盤龍鏡系倭鏡2面である。その他にも獸文鏡系倭鏡が数面存在している〔宮内庁書陵部2005〕。ここでも、和泉黄金塚古墳と同じく、帯金革綴式甲冑を副葬する古墳の築造を契機として、保有する古い鏡を一括して副葬した状況を確認することができる。

和泉黄金塚古墳も津堂城山古墳もともに、帯金革綴式甲冑を副葬する古墳が地域の古墳築造の嚆矢となる点は共通している。この契機に保有していた鏡を一括して副葬したことも共通しており、帯金式甲冑の副葬が保有鏡の副葬の画期をなす事例として評価することができよう。なお、両古墳では共伴する鏡には違いがある。和泉黄金塚古墳では中国鏡のみの構成であり、津堂城山古墳では三国西晋鏡と倭鏡が混在していた。こうした鏡種の違いは、帯金式甲冑の入手あるいはそれを契機として古墳を築造する段階まで、地域に蓄積していた、地域で保有していた鏡の様相を反映するものと考えられる。

## 3 大阪府桜塚古墳群と古市古墳群の3古墳—盾塚・鞍塚・珠金塚—

桜塚古墳群は、摂津豊中地域に形成された系列であり、大型円墳である豊中大塚古墳の築造を嚆矢として、御獅子塚古墳から南天平塚古墳、狐塚古墳へと古墳の築造が継続する〔森岡ほか1992、豊中市2005〕。桜塚古墳群を対象とした甲冑と鏡の副葬についてはすでに詳細な検討があり、帯金式甲冑の副葬に際して、地域で保有していた鏡群を副葬したことが指摘されている〔森下1998b〕。また、女塚古墳に渦文鏡系倭鏡（第3期倭鏡）を副葬したことから、帯金鋳留式甲冑の副葬に際しては、新たに入手した鏡の副葬も併行したことが明らかになっている。なお、豊中大塚古墳と御獅子塚古墳と南天平塚古墳では第1期倭鏡を副葬するのに対して、後出の狐塚古墳では三国西晋鏡の

四獣鏡を副葬していることには注目しておきたい。保有鏡の副葬において、倭鏡を優先した可能性も想定できるからである。

古市古墳群には、津堂城山古墳に始まる大型前方後円墳の系列に附随して、円墳や方墳、帆立貝式前方後円墳など規模の小さな古墳の築造も併行した〔天野・秋山・駒形1992〕。盾塚古墳や鞍塚古墳や珠金塚古墳は、菅田御廟山古墳に近接する小規模な古墳であり、古市古墳群の形成期に築造した盾塚古墳から鞍塚古墳へ、そして珠金塚古墳へと築造が継続してゆく〔末永編1991〕。3古墳は相互に隣接しており、築造時期も近いことから、被葬者の間に何らかの関係があることを想定できる。いずれの古墳でも、帯金式甲冑と鏡を副葬していた。盾塚古墳では、粘土槨の埋葬施設に長方板革綴短甲と三角板革綴短甲と三角板銕留角付革綴冑と獣文鏡系倭鏡を副葬していた。鞍塚古墳では、木棺直葬の埋葬施設に三角板革綴短甲と三角板銕留角付冑と方格規矩四神鏡系倭鏡を副葬していた。珠金塚古墳では、2基の粘土槨を併設しており、先行する南槨には、小札銕留角付冑と革綴短甲（うち一つは三角板革綴短甲）の組合せ2組を棺内に、三角板銕留短甲と三角板銕留角付冑の組合せと三角板革綴短甲を棺外に副葬しており、鏡は獣文鏡系倭鏡2面を棺内に副葬していた。北槨では、三角板銕留短甲と環状乳神獣鏡と模倣方格規矩鏡を副葬していた。3古墳での甲冑と鏡の組合せは、盾塚古墳が帯金革綴式甲冑と第1期倭鏡の組合せであり、鞍塚古墳が帯金革綴式甲冑・銕留式甲冑と第1期倭鏡の組合せ、珠金塚古墳南槨が帯金革綴式甲冑・銕留式甲冑と第2期倭鏡の組合せであり、珠金塚古墳北槨が帯金銕留式甲冑と三国西晋鏡の組合せとなっている。盾塚古墳から鞍塚古墳へ、そして珠金塚古墳南槨から北槨へと、埋葬の順序に対応して、副葬する甲冑は帯金革綴式甲冑から帯金銕留式甲冑へと推移する。副葬する鏡もそれに対応して、第1期倭鏡から第2期倭鏡へ、そして三国西晋鏡へと変遷したのである。ここでも、桜塚古墳群と同じく、帯金式甲冑の副葬が進行する中で保有鏡を順次副葬した様子がみえる。なお、盾塚古墳と鞍塚古墳に副葬した第1期倭鏡の獣文鏡系倭鏡と方格規矩四神鏡系倭鏡は、桜塚古墳群の豊中大塚古墳と御獅子塚古墳の副葬鏡と鏡背文様の表現や配置が類似している。そして、もっとも新しい珠金塚北槨にもっとも古い三国西晋鏡を副葬する状況は、狐塚古墳に三国西晋鏡を副葬することとも類似している。古市古墳群の3古墳と桜塚古墳群では、保有鏡の構成や保有から副葬へと進行する過程に類似点があり、帯金式甲冑と保有鏡の副葬をめぐる動きに同じ傾向があることを指摘できよう。

桜塚古墳群と古市古墳群の3古墳では、帯金革綴式甲冑を副葬する古墳の築造が契機となり、それ以後甲冑の副葬と保有鏡の副葬が継続する。両地域で類似する副葬傾向は、帯金革綴式甲冑の副葬が保有鏡の副葬の画期をなす一つの形態として評価できよう。

帯金革綴式甲冑の副葬を定点として、保有鏡の副葬の実態を整理したが、地域によって状況は異なり必ずしも一様ではないことが明らかになった。帯金革綴式甲冑を副葬する段階では、地域では保有鏡を副葬する動きが顕著ではあるものの、各地域の事情がその実態を大きく左右したのである。

## ⑤……………帯金式甲冑と保有鏡の副葬を通してみる古墳時代中期

甲冑と鏡の生産段階を整理し、古墳における組合せ関係に注目することによって、帯金革綴式甲冑を副葬する段階には、保有鏡を副葬する動きが顕著となることを指摘し、保有鏡の副葬が比較的普遍性をもっていたことを明らかにした。保有から副葬へという動きは、保有鏡の実態や前後に継続する古墳造営の有無など、それぞれの地域の事情を反映した多様なあり方をみせたのであるが、保有鏡を副葬することは特定地域に限らない比較的普遍性をもった現象であった。それは、新相の鏡が希薄であるが故に鮮明となった現象である。この帯金革綴式甲冑を副葬する時期は、保有鏡を副葬する時期であったと言い換えてもよいであろう。帯金式甲冑を副葬する時期を古墳時代中期と同義とするならば〔橋本2005・2010〕、その前半段階は前期的な保有鏡を副葬する段階であったのである。帯金式甲冑という新たな威信財とともに、それ以前に入手し地域で保有していた古い威信財を副葬する動きは、前期的な鏡が伝世することを必要としなくなりつつある過程と形容することができよう。甲冑と鏡は、その形態や本義的な機能から、個人への帰属性の強弱が異なることはつとに指摘されている。甲冑という属人性の強い威信財の副葬によって、これまでは地域で保有する属人性が必ずしも高くはなかった鏡を個人へと帰属させてゆく動きが加速したと評価することも可能であろう。

それに対して、帯金鉾留式甲冑を副葬する段階では、新たに入手した鏡との組合せが主流となる。それは、地域で保有する鏡の存在が希薄になっていることを反映していよう。この段階までに、保有鏡の副葬が相当進行したことを意味している。しかし、保有鏡の一部には帯金式甲冑の副葬が終了した後まで保有を継続した例があり、新たに入手した鏡にも地域での保有を経て副葬に至るまで相当な時間を要した事例もあるように〔森下1998b, 川西2004〕、地域で鏡を保有することは収束し<sup>(11)</sup>つつも継続したのである。

帯金革綴式甲冑の副葬を通してみえてくる保有鏡の実態は、地域が威信財を保有することがあることと、威信財の副葬に際して地域の意志（選択）が働いていることを鮮明にしたのである。副葬品の組成は、古墳の築造に際して何を副葬するのかという地域の論理を反映したものであり、そこに地域を如何に評価するかという王権の配布論理を直接見出すことは難しい。保有鏡の存在は、威信財という王権の評価が蓄積した結果であり、それを副葬の対象とする判断は地域の論理に基づいている。和泉黄金塚古墳や鋤崎古墳などのように一括して保有鏡を副葬する場合や、桜塚古墳群や久津川古墳群のように保有を継続しつつも一部は副葬する場合があります、保有の途絶も一様ではなかった。地域での威信財の保有という視点は、副葬品の組成を単独の古墳のみで理解するのではなく、古墳群を造営する流れの中で考えるべきことを示唆する。長期間の保有を経たものであれ、新たに入手したものであれ、地域が保有する威信財を副葬する場が古墳なのである。しかし、威信財の配布を受けることと、古墳を築造することは必ずしも連動するとは限らない。なお、長い期間にわたって保有の途絶が進行する場合は、一連の系列においても鏡を副葬しない古墳も存在したであろう。現状の副葬品組合せを、無意識に被葬者の所有の実態として重ねることに対しては注意して

おきたい。配布と副葬を直結するのではなく、地域で保有することや地域の論理で副葬することを今少し積極的に評価してもよいのではないだろうか。

地域で保有した威信財の副葬という現象は、鏡という資料の特殊性に起因する可能性はある〔森下 1998b・2005〕。しかし、甲冑であっても数は少ないものの、生産段階の異なる甲冑を組合せて副葬する事例が存在する。京都府瓦谷1号墳では小札革綴冑と方形板革綴短甲が共伴しており、三重県石山古墳では小札革綴冑と長方形板革綴短甲が共伴していた。これらは、方形板革綴短甲や長方形板革綴短甲を副葬する段階まで、小札革綴冑を地域で保有していたことを意味する。また、生産段階の離れた長方形板革綴短甲と三角板鋌留短甲とが共伴していた兵庫県小野王塚古墳などのように〔西田・阪口編 2006〕、帯金鋌留式甲冑を副葬する段階にも、象徴性を意識して古相の革綴式甲冑を保有したことが指摘されている〔鈴木 2008〕。保有鏡の副葬は、こうした生産・配布段階の異なる甲冑を組合せた副葬とも同調する現象であろう。それは、マロ塚古墳の3組の甲冑が組合わされた背景を考える上でも示唆的である。

古墳に副葬した鏡と甲冑の組み合わせは地域というフィルターを通した結果であり、地域の論理や意志がその実態を大きく左右したのである。帯金革綴式甲冑の副葬を通じてみえる保有鏡の実態は、古墳の副葬品組成を検討する上で、王権と地域という視点の違いを意識することの重要性を改めて指摘したものといえよう。

なお、保有鏡の副葬という視点は、岡山県随庵古墳や正崎2号墳など幅広のいわゆる渡来系竪穴式石槨を埋葬施設にもつ古墳に対しても新たな視点をもたらすと考える。随庵古墳では、三角板鋌留短甲と横矧板鋌留衝角付冑と双頭龍文鏡を副葬しており〔鎌木編 1965〕、正崎2号墳では、横矧板鋌留短甲と小札鋌留衝角付冑に画像鏡系倭鏡を副葬していた〔宇垣・高畑編 2004〕。この帯金鋌留式甲冑と三国西晋鏡あるいは第1期倭鏡との組合せは、いずれも鏡の生産段階と甲冑の生産段階が大きく隔たる組合せであり、帯金鋌留式甲冑の副葬に際して、地域で保有した鏡を副葬したことがうかがえる。随庵古墳と正崎2号墳の埋葬施設は、瀬戸内海沿岸地域に限定して存在する幅広の竪穴式石槨であり、加耶地域の竪穴式石槨に系譜を求めることができる。幅広の竪穴式石槨は、垂飾付耳飾や馬具の副葬などを特徴とすることから、朝鮮半島との関係が深い人物が被葬者に想定されている〔高田 1999・2006〕。こうした古墳での保有鏡の副葬は、被葬者の別な一面を反映していると考えられる。地域での保有を経た鏡は、地域社会と被葬者の関係を象徴する存在である。加耶系竪穴式石槨という埋葬施設が極言するように渡来的な色彩が濃厚ななかにも、地域で保有し続けた鏡の供献・副葬を受けるなど、両古墳の被葬者は地域社会との関係をも保有する人物であったことを示していよう。こうしたことも、地域で保有する威信財の副葬という視点を通じて見えてくる新たな一面があることを付記しておきたい。

## おわりに

甲冑と鏡の組合せに注目することによって、地域において保有する鏡の実態を明らかにした。ことに帯金革綴式甲冑の副葬には、地域で保有した鏡を伴うことが多い。それは、古墳時代中期前半

という時代を象徴する一面であるといえよう。一方、比較的普遍性をもった保有鏡の存在は、副葬品が王権の配布した威信財であると同時に、地域の保有する威信財でもあることを改めて強調する。古墳の副葬品を検討する視点として、王権と地域という視点の違いを改めて認識すべきことを、本論のまとめとして筆を擱くことにしたい。

## 註

(1)——前方後円墳集成編年などの時期区分は、副葬という現象の段階区分であり、副葬した威信財の生産段階を直接示しているわけではない〔和田1987、広瀬1992、大賀2002等〕。生産の画期と副葬の画期は結果的に重なる部分があっても、それぞれ別次元の現象である。

(2)——「某系倭鏡」という名称は、倭鏡を一つの鏡群としてとらえ、表現の異なる各鏡式を系列として評価する見解に基づく〔森下1991〕。これは、中国鏡と倭鏡との混同を避ける有効な視点であり、本稿では倭鏡の名称をこれに従うことにする。

(3)——小札革綴甲は、現在のところ奈良県城山2号墳の1例に限られており、ここでは鏡は共伴していない。次章以下では、7甲冑と鏡の共伴関係に基づいて分析を進めるため、小札革綴甲のみを取り扱うこととなる。

(4)——同一墳であれば、埋葬施設が異なっても鏡と甲冑が共伴すると評価して検討を進める。被葬者個人への帰属という意味では厳密に区分すべきであろうが、地域での威信財の保有主体が必ずしも首長に限られないことや、被葬者の社会的職掌を反映して別埋葬施設で分有した可能性から、古墳の築造とその埋葬に際して甲冑と鏡が副葬に供されたという広義の共伴現象として評価した。

(5)——鏡に関する情報は国立歴史民俗博物館による出土鏡データベースに基づき、甲冑に関する情報は埋蔵文化財研究集会による情報集成に基づいて分析を進めた〔白石・設楽編1994・2002、埋蔵文化財研究集会第33回実行委員会編1993〕。それ以後の新出情報については、共同研究での成果である本書第5部の一覧表に依拠しつつ検討を進めた。

(6)——帯金鉾留式甲冑と小札甲を比較すれば、小札甲に生産段階の新しい鏡がより多く対応している。この状況は、帯金鉾留式甲冑と小札甲の生産期間の長短を反映したものといえよう。

(7)——古墳時代の政治論では、古墳への副葬を積極的に評価して、各地の首長が威信財の配布を受けたと解釈することが多い。しかし、大阪府桜塚古墳群では、一括してもたらされた鏡群が、古墳の造営に伴って少しずつ

副葬へ供されたことが明らかになっている。こうした状況は、配布された威信財が首長個人に帰属するのではなく、地域集団あるいは特定階層で共同管理していた可能性をうかがわせる〔森下1998b〕。副葬することによって最終的に威信財は被葬者個人に帰属しても、威信財の受容や保有が首長個人に帰するとは限らない。地域社会で威信財を保有する主体者が不明瞭であることから、包括的な「地域」という表現を用いた。

(8)——甲冑と鏡の組合せ関係において、最新相の鏡が対応しないものを「保有を経た」と判断する。本論では、甲冑と鏡との共伴関係について、前期から後期にかけての流れや傾向を把握するため、その生産段階を前期・中期前半・後半というより長い時間幅で区分した。厳密な意味での長期保有を峻別することは難しいが、本論で主に取り上げる保有鏡は、中期的な帯金式甲冑と共伴する三国西晋鏡や第1期倭鏡などの前期的な鏡であり、長期保有を経たものとして取り扱うことに異論はないと考える。以下では、「保有」という表現に長期保有のニュアンスを含めていることを注記しておきたい。

(9)——本論では、舶載と倭製を生産段階の区別として認識し、生産地の違いを反映した表現としてはとらえない。系列や製作技術など両者の間には大きな違いがみえるが、それが生産地の変化に由来することを示す積極的な根拠はないと考える。

(10)——久津川車塚古墳では、三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡の他に、第1期倭鏡としての環状乳神獸鏡系倭鏡や第2期倭鏡としての斜縁四獣鏡B系倭鏡などを副葬している。帯金革綴式甲冑の副葬に際して、保有鏡の副葬と入手鏡の副葬が共存する状況がみえる。

(11)——千葉県城山1号墳や静岡県甕塚古墳などでは、三国西晋鏡や第1期倭鏡などを後期古墳に副葬しており、少ないながらも非常に長い保有期間を経た鏡を副葬した例が存在する。なお、南北朝鏡の同型鏡群でも、副葬時期が大幅に遅れる事例が少なくない〔川西2004〕。新たに入手した南北朝鏡でも、地域での長期保有をへて副葬に至る事例があることを示していよう。

## 引用・参考文献

- 天野末喜・秋山浩三・駒井正明 1992「河内」『前方後円墳集成』近畿編，近藤義郎編，山川出版社，pp.75-86
- 岩本 崇 2003「仿製三角縁神獣鏡の生産とその展開」『史林』第八六巻第五号，史学研究会，pp.1-39
- 岩本 崇 2005「三角縁神獣鏡の終焉」『考古学研究』第51巻第4号，考古学研究会，pp.48-68
- 岩本 崇 2008「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第92巻第3号，日本考古学会，pp.1-51
- 上野祥史 2004「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集，pp.403-433
- 上野祥史 2007「3世紀の神獣鏡生産—画文帯神獣鏡と銘文帯神獣鏡—」『中国考古学』第7号，日本中国考古学会，pp.189-216
- 宇垣匡雅・高畑富子編 2004『正崎2号墳』（『正崎2・4号墳』復刻 甲冑の整理・保存処理報告書），山陽町文化財調査報告第1集，岡山県山陽町教育委員会
- 内山敏行 2008「小札甲の変遷と交流—古墳時代中・後期の緘孔2列小札とΩ字型腰札—」『玉権と武器と信仰』菅谷文則編，同成社，pp.708-717
- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山墳墓群』福井県清水町教育委員会，pp.1-20
- 大塚初重 1959「大和政権の形成 武器道具の発達」『世界考古学大系』第三巻 日本Ⅲ 古墳時代，小林行雄編，平凡社，pp.67-87
- 岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号，史学研究会，pp.1-41
- 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集，pp.39-83
- 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
- 鎌木義昌編 1965『随庵古墳』総社市教育委員会
- 川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 岸本直文 1989「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号，史学研究会，pp.1-42
- 岸本直文 1995「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会40周年記念論集，pp.109-116
- 岸本直文 1996「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」『雪野山古墳の研究』考察篇，雪野山発掘調査団編，pp.81-106
- 北野耕平 1963「中期古墳の副葬品とその技術史的意義—鉄製甲冑における新技術の出現—」『近畿古文化論攷』吉川弘文館，pp.163-184
- 久住猛雄・宮元香織 2010「筑前地方における首長墓系列の再検討」『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表資料要旨，pp.5-48
- 宮内庁書陵部陵墓課編 2005『宮内庁書陵部所蔵 古鏡集成』学生社
- 車崎正彦 2002a「三国鏡・三角縁神獣鏡」『考古学資料大観』第5巻，小学館，pp.181-188
- 車崎正彦 2002b「六朝鏡」『考古学資料大観』第5巻，小学館，pp.201-204
- 近藤喬一 1993「西晋の鏡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集，国立歴史民俗博物館，pp.117-206
- 小林謙一 1974a「甲冑製作技術の変遷と工人の系統 上」『考古学研究』第20巻第4号，考古学研究会，pp.48-68
- 小林謙一 1974b「甲冑製作技術の変遷と工人の系統 下」『考古学研究』第21巻第2号，考古学研究会，pp.37-47
- 小林行雄 1959「たんこう」『図解 考古学辞典』水野誠一・小林行雄編，東京創元社
- 小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店
- 阪口英毅 1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲—変遷とその特質—」『史林』第81巻第5号，史学研究会，pp.1-39
- 阪口英毅 2001「鉄製甲冑の系譜—基本構造と連接技法の検討を中心に—」『季刊考古学』第76号，雄山閣出版，pp.34-38
- 阪口英毅 2005「紫金山古墳出土武器の再検討」『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』（平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書）pp.339-346
- 阪口英毅 2008「いわゆる『銕留技法導入期の評価』」『古代武器研究』vol.9，pp.39-51
- 阪口英毅 2009「前期・中期型甲冑の技術系譜」『考古学ジャーナル』No.581，pp.7-11
- 澤田秀実 1993「三角縁神獣鏡の製作動向」『法政考古学』第19集，法政考古学会，pp.17-38
- 清水和明 1996「東アジアの小札甲の展開」『古代文化』第48巻第4号，古代学協会，pp.1-18
- 清水和明 2009「小札甲の製作技術と系譜の検討」『考古学ジャーナル』No.581，pp.22-26
- 下垣仁志 2002「前方部埋葬論」『古代学研究』第158号，古代学研究会，pp.1-15
- 下垣仁志 2003a「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第49集，九州古文化研究会，pp.19-50

- 下垣仁志 2003b「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第50集(上),九州古文化研究会, pp.7-36
- 下垣仁志 2010『三角縁神獸鏡研究事典』吉川弘文館
- 下垣仁志編 2011『倭製鏡一覽』立命館大学考古学資料集第4冊,立命館大学考古学論集刊行会
- 城陽市史編さん委員会編 1999『城陽市史』第三卷
- 白石太一郎・設楽博己編 1994「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集, pp.1-858
- 白石太一郎・設楽博己編 2002「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 補遺1」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集, pp.47-122
- 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡書院
- 末永雅雄 1944『増補 日本上代の甲冑』創元社
- 末永雅雄・島田暁・森浩一 1954『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第5冊
- 末永雅雄 1981『増補 日本上代の甲冑』本文篇・圖版編,木耳社
- 末永雅雄編 1991『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会
- 鈴木一有 2004「下開発茶白山9号墳出土甲冑の検討」『下開発茶白山古墳群Ⅱ—第3次発掘調査報告書—』石川県辰口町教育委員会, pp.119-126
- 鈴木一有 2008「古墳時代の甲冑にみる伝統の認識」『王権と武器と信仰』菅谷文則編,同成社, pp.718-729
- 鈴木一有 2009「中期型冑の系列と変遷」『考古学ジャーナル』No.581, pp.12-16
- 田中晋作 1991「武具」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品,石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編,雄山閣出版, pp.39-55
- 田中晋作 1993「百舌鳥・古市古墳群成立の要件—キャストイング・ボートを握った古墳被葬者たち—」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四拾周年記念,関西大学文学部考古学研究室, pp.187-213
- 高橋克壽 1993「四世紀における短甲の変化」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第六冊,京都大学考古学研究室, pp.120-125
- 高田貫太 1999「瀬戸内における渡来文化の受容と展開」『渡来文化の受容と展開—5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2)—』,第46回埋蔵文化財研究集会実行委員会編, pp.167-202
- 高田貫太 2006「5、6世紀の日朝交渉と地域社会」『考古学研究』第53巻第2号,考古学研究会, pp.24-39
- 豊中市 2005『新修 豊中市史』第4巻 考古,豊中市史編さん委員会
- 滝沢 誠 1991「鋌留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号,日本考古学会, pp.16-61
- 辻田淳一郎 2007『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 西田猛・阪口英毅編 2006『小野王塚古墳出土遺物保存処理報告書』小野市文化財調査報告第27集,兵庫県小野市教育委員会
- 野上丈助 1968「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』第14巻第4号,考古学研究会, pp.12-43
- 野上丈助編 1991『論集 武具』学生社
- 新納 泉 1991「権現山鏡式群の型式学的位置」『権現山五一号墳』 pp.176-185
- 橋本達也 1995「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義—眉庇付冑を中心として—」『考古学雑誌』第80巻第4号,日本考古学会, pp.1-33
- 橋本達也 1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇,雪野山発掘調査団編, pp.255-292
- 橋本達也 1998「堅矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」『青丘学術論集』第12集,(財)韓国文化研究振興財団
- 橋本達也 2004「永浦4号墳出土副葬品の意義—甲冑・鉄鏃を中心として—」『永浦遺跡—第1・2次調査—』古賀市文化財調査報告書第35集,古賀市教育委員会, pp.153-168
- 橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論—松林山古墳と津堂城山古墳から—」『待兼山論叢—都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室, pp.539-556
- 橋本達也 2010「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価—中期と後期を分かつもの—」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室編, pp.481-501
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』 pp.24-26
- 福岡市教育委員会編 1989『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
- 福永伸哉 1994「仿製三角縁神獸鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第1号,考古学研究会, pp.47-72
- 福永伸哉 1996「舶載三角縁神獸鏡の製作年代」『待兼山論叢』第30号,大阪大学文学部, pp.1-22

- 福永伸哉 1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘論叢』第12集, (財) 韓国文化研究振興財団
- 藤井利章 1982「津堂城山古墳の研究」『藤井寺市史紀要』第三集, 藤井寺市史編さん委員会, pp.1-64
- 古谷 毅 1996「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81巻第4号, 日本考古学会, pp.58-85
- 古谷 毅 2006「方形板革綴短甲の基礎的研究(1)」『東京国立博物館紀要』第41号, pp.137-156
- 古谷 毅 2009「古墳時代金属製甲冑研究の新段階」『考古学ジャーナル』No.581, pp.3-6
- 埋蔵文化財研究集会第33回研究集会実行委員会編 1993『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』
- 松村隆文・広瀬和雄 1992「和泉」『前方後円墳集成』近畿編, 近藤義郎編, 山川出版社, pp.87-93
- 三木文雄 1989「筑前国卯内尺古墳出土と伝える鏡」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集, pp.219-224
- 森岡秀人・吉村健 1992「摂津」『前方後円墳集成』近畿編, 近藤義郎編, 山川出版社, pp.68-74
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号, 史学研究会, pp.1-43
- 森下章司 1998a「古墳時代前期の年代試論」『古代』第105号, 史学研究会, pp.1-28
- 森下章司 1998b「鏡の伝世」『史林』第81巻第4号, 史学研究会, pp.1-34
- 森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『弥生時代・古墳時代 鏡』考古学資料大観 第5巻 小学館, pp.305-316
- 森下章司 2005「器物の生産・授受・保有形態と王権」『国家形成の比較研究』学生社, pp.179-194
- 柳沢一男 1992「筑前」『前方後円墳集成』九州編, 近藤義郎編, 山川出版社, pp.31-40
- 柳沢一男・杉山富雄編 2002『鋤崎古墳—1981～1983年調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集, 福岡市教育委員会
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号, 考古学研究会, pp.44-65
- 和田晴吾 1992「山城」『前方後円墳集成』近畿編, 近藤義郎編, 山川出版社, pp.56-67
- 吉村和昭 1988「短甲系譜詩論—鋌留技法導入以後を中心として—」『考古学論攷』橿原考古学研究所紀要 第13冊, pp.23-39
- 横須賀倫達 2009「後期型鉄製冑の系統と系譜」『考古学ジャーナル』No.581, pp.17-21

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2011年7月25日受付, 2011年11月11日審査終了)

## ***Obigane-shiki* Armor and Mirrors as Grave Goods**

UENO Yoshifumi

Grave goods buried in tumuli have two different aspects. On the one hand, they were distributed by the royal government, while on the other they were buried in local tumuli. Through an awareness of the different aspects of grave goods as both distributed and buried, it is possible to evaluate Kofun Period society from the different points of view of the royal government and the locality. In this study I focus on the phenomenon of the co-occurrence (burial at the same time) of armor and mirrors, and evaluate the regional trends in the middle Kofun Period, corresponding roughly to the fifth century.

First, I set down the chronological phase of the armor and mirrors, and also their combinational relationships within the tumuli. I point out that at the phase where *obigane kawatoji-shiki* (leather-laced laminar) armor was treated as grave goods, there were simultaneous trends where retained mirrors (mirrors that had been retained for a fixed period of time locally) were treated as burial goods. I examined the background of this phenomenon from the point of view of the relationship with *sankaku-buchi shinjū kyō* (三角縁神獸鏡) mirrors and the construction of local tumuli. I also discuss aspects of the middle Kofun Period and concurrent diverse regional trends.

The phenomenon of the new armor appearing with the old mirrors as set out in this study is symbolic of one facet of the first half of the middle Kofun Period. On the other hand, the relative universality of this phenomenon re-emphasizes the point that not only were these grave goods distributed by the royal government, but they were also retained locally. Studying tumuli grave goods brought up the importance of an awareness of the differences of viewpoints represented by royal government and the locality.

Keywords: *obigane shiki* armor (帶金式甲冑), Chinese mirrors, Japanese mirrors, *sankaku-buchi shinjū kyō* (三角縁神獸鏡), retained mirrors, local society